33

世界文学全集

静かなドン〈2〉

ショーロホフ／原卓也訳

世界文学全集　33

静かなドン　Ⅱ

ミハイル・ショーロホフ

訳者　原卓也

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／東洋印刷株式会社　製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

第二卷

第四編（續）……5

第五編……55

第三卷

第六編……295

Тихий Дон

М. А. Шолохов

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

静かなドン

（Ⅱ）

誉れも高き静かなドンよ、
われらの父なる静かなドンよ、
おまえを賛えて昔から、
きれいな、立派な歌がある。
ドンよ、おまえの流れは早く、
水も底まで澄んでいた。
けれども今や、静かなドンは、
すっかり濁って見通せぬ。
静かなドンは愚痴こぼす。
《水が濁るも当り前、
子飼いの鷹たるドン・コサックを、
わたしはとうとう手放した。
コサックなきあと、崖くずれおち、
黄色い砂がこぼれるからさ》

（古いコサック民謡）

第二巻

第四編（続）

16

すでに八月二十九日には、クルイモフから接受した電報によって、クーデターの失敗に帰したことが、コルニーロフにははっきりした。

午後二時、クルイモフの将校伝令が司令部に到着した。コルニーロフは長いこと彼と会談したあとで、ロマノフスキイを呼び、神経質になにかの紙をもみくちゃにしながら言った。

「万事休すだ！　この勝負には負けたらしい……クルイモフは間に合うように軍隊をペトログラートへ集結させることができないだろう。時機を失してしまうだろう。この場合、おくれるっていうことは、とりも直さず、破滅することなんだ。実に簡単に実現できると思っていたことが、何千という障害にぶつかっているんだからね……悪い結末になるのは、最初から決まってるんだ……ほら、見たまえよ、この軍隊の配置具合を？」彼は軍団やトゥゼムナヤ師団の軍用列車が最後に立往生している場所に印しをつけてある地図を、ロマノフスキイにひろげて見せた。睡眠不足のためにしかめられた、精力的な彼の顔を、ひくひくと痙攣が走った。「鉄道従業員のやつらがこぞってわれわれに邪魔立てしているんだ。やつらは、こっちが成功した暁には、わしがやつらの一割にたいして絞殺刑を命ずるだろうなんて、考えても見ないのだからねえ。クルイモフの報告を読んで見たまえ」

ロマノフスキイが大きな手で、ぶくぶくと脂ぎった顔を撫でまわしながら読んでいるあいだに、コルニーロフはなぐり書きで書き上げた。

ノヴォチェルカッスク。軍団アタマン。アレクセイ・マクシーモウィチ・カレージン殿。

臨時政府あての貴官の電報の主旨に関しては余も報告を受けた。裏切り者や変節漢との無益な闘争にこれ

以上耐えることができぬため、光輝あるコサック軍は、祖国の避けがたい破滅を目前に見て、敢然としてここに武器をとり、コサックの労苦と熱血とによって成長し発展したる祖国の、生命と自由を擁護するであろう。われわれの関係は暫時のあいだ種々の拘束を受けることであろう。くれぐれも余と呼応せられて、愛国心とコサックの名誉との教えに従い行動せられんことを。

指令六五八。一九一七、八、二九。

コルニーロフ将軍

「この電報をすぐ渡してください」書き終えると、彼はロマノフスキイに頼んだ。

「行軍隊形をとって進軍を続行するように、もう一度バグラチオン公爵に電報を打っておきましょうか？」

「うん、たのむ」

ロマノフスキイは、しばらく黙っていたが、物思いに沈んだ口調で言った。

「ラヴル・ゲオルギエウィチ、わたしの考えでは、まだそう悲観することもないと思いますが。閣下は事態を悪いほうに悪いほうにと予想されておられるんですよ……」

コルニーロフはせわしなく手をのばして、頭上に舞う小さな紫の蝶をつかまえようとした。指をかたく握りしめた。顔には待ちもうけるような軽い緊張の色が見られた。蝶は急激に断ち切られた空気にあおられて、ふらふらと落ちかかったが、新たに羽根を動かして舞い上がり、あけ放たれた窓のほうへ飛んで行きかけた。が、コルニーロフはそれでもとうとう蝶をつかまえることに成功した。そしてほっと長い息をもらし、肘掛け椅子の背へふかぶかと身をもたせた。

ロマノフスキイは自分の反駁に対する返事を待っていた。しかしコルニーロフは憂うつそうな暗い笑いをたたえながら、話し出した。

「昨晩、夢を見たよ。わしがある狙撃師団の一旅団長になって、カルパチヤ山脈で攻撃をしてるんだ。幕僚を従えて、ある農場に出かけて行くと、りゅうとした身なりの中年の小ロシヤ人が出迎えてくれてね。わしに牛乳をごちそうして白いフェルト帽をとりながら、きれいなドイツ語でこう言うのさ。《さあ、あがってください、将軍！　この牛乳はすばらしく滋養になりますよ》。わしはそれを飲んだんだ。しかもその小ロシ

ヤ人がいやになれなれしく肩なんぞたたいたりするのが、少しもふしぎな気がしないんだな。それから、また山の中を行軍して行くんだが、今度はもうカルパチヤ山脈じゃなくて、アフガニスタンのどこか、いわゆる『羊腸の小径』というような道を進んでいるんだ……そう、まさに羊腸の小径だったね。石やら、赤茶けた砂利やら、ざらざら足の下からくずれ落ちていく。一方、下を望めば、谷を越した向こうにさんさんと真昼の日射しを浴びた、美しい南国の景色が見えているんだな……」

軽やかな吹き抜け風が机上の書類をざわめかせながら、あけ放たれた両開きの窓から流れこんだ。遠くを望むようなコルニーロフの暗いまなざしは、どこかドニエプル河の対岸の、さっと一刷毛黄をはいた青銅色の草原に仕切られた、谷のようなけわしい坂のあたりをさすらっていた。

ロマノフスキイは彼の視線を追い、自分もひそかに吐息をもらすと、風がないため一面にガラスを張り渡したように見えるドニエプルの河面の、雲母のような輝きや、早くも初秋のやさしい風趣を帯びている煙るような野面に目をやった。

17

ペトログラートへ向けて投ぜられた第三騎兵軍団とトゥゼムナヤ師団の諸部隊は、八つの鉄道線に沿う非常な長距離にわたって配置されていた。レウェリ、ウェーゼンベルク、ナルワ、ヤムブルク、ガッチナ、ソムリノ、ヴィリッツァ、チュドヴォ、グドフ、ノヴゴーロット、ドゥノー、プスコフ、ルガの諸駅をはじめ、ほかの中間駅から待避駅にいたるまで、すべて駅という駅は、徐々に移動しつつある軍用列車や、すっかり立往生してしまった軍用列車で、いっぱいだった。連隊はいずれも上層部から士気を鼓舞されることなど全然なく、孤立した各中隊は相互間の連絡を失っていた。混乱は、軍団が行軍中にトゥゼムナヤ師団をあわせて一軍を編成したことによって、いっそう深められた。つまり各所に散らばっていた諸部隊を、ある程度移動させ、集結し、軍用列車の編成替えを行なったりしなければならなくなったのだ。こういったことのいっさいが、混乱をひき起こし、不合理な、ときには全然首尾一貫せぬ命令を生み、ただでさえ神経の張りつめ

ているいらいらした空気に、拍車をかける結果となったのである。

途中、労働者や鉄道従業員の自然発生的な反対運動に遭遇し、種々の障害を克服しながら、コルニーロフ軍の各軍用列車は、ペトログラートをさして静かに進み、分岐駅でごたごたとかたまっては、またばらばらに散っていった。

赤く塗られた狭苦しい車室には、鞍をはずした、半ば飢えた馬のわきに、これもほとんど飲まず食わずの、ドン、ウスリイ、オレンブルク、ネルチンスク、アムールのコサックや、イングシ、チェルケス、カバルダ、オセチン、ダケスタンの山窩兵たちが、押し合っていた。列車は出発命令を待って、何時間も駅に立往生する。すると騎兵たちはどやどやとわれがちに車室をとび出し、イナゴのように停車場にあふれ、線路にひしめき合い、前に通過した列車が残していったもので、およそ食えそうなものなら、片端からより好みなくむさぼり食い、住民たちのところでこそ泥を働き、食糧倉庫の略奪をやらかしたりする始末だった。

コサックたちの赤や黄色の側章、竜騎兵たちの派手な服、山窩兵たちのチェルケス服……色彩に乏しい北国の自然は、かつてこれほど豊富な色彩の配合を見たことがなかった。

八月二十九日、ガガーリン公爵の率いるトゥゼムナヤ師団第三旅団は、パウロフスク付近で、早くも敵と接触した。かねて研究しておいた道へ出ると、師団の先頭を進んでいたイングシおよびチェルケスの連隊は、列車を降り、ツァールスコエ・セロへ向かって、行軍隊形で出発した。イングシ人の斥候隊はソムリノ駅近くまではいり込んだ。連隊はテンポを緩慢にして攻撃を展開し、師団の後続部隊が到着するのを待ちながら、近衛部隊を圧迫していた。ところがその後続部隊は、ドゥノー駅で出発を待っていた。まだこの駅にさえ着いていない部隊もあった。

トゥゼムナヤ師団の師団長バグラチオン公爵は、行軍隊形でヴィリッツァ駅へおもむく危険をあえて冒そうとせず、後続諸部隊の集結を待って、駅からほど遠からぬ領地にとどまっていた。

二十八日、彼は北部戦線司令部からつぎのような電報の写しを受けとった。

第三軍団司令官ならびに、第一ドン、ウスリイ、お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

よびコーカサス・トゥゼムナヤ師団の各師団長に、左のごとき最高司令官の命令を伝達されたし。すなわち、万一何らかの予期せざる事情の結果、鉄道による部隊移動に困難発生の場合には、最高司令官は行軍隊形をとって以後の移動を続行するよう、各師団長に命ず。

一九一七年八月二十七日。

指令第六四一一号

ロマノフスキイ

午前九時ごろ、バグラチオンはコルニーロフに電報を打ち、今朝六時四十分、ペトログラート軍管区参謀長バグラトゥーニ大佐を通じて、全軍用列車を引き返せとのケレンスキイの命令を受けたこと、臨時政府の指令によって鉄道がタブレット（原注　列車の運行を制限する手段の一つで、旅行の自由を示す特別のタブレットを受けないと、機関士が駅から発車させられない）を出さないため、師団の軍用列車はガチカ分岐駅からオレデジ駅にいたる線で立往生していることを報告した。しかし彼の受けたコルニーロフの決定が、

《バグラチオン公爵殿。鉄道により行動を続行せられよ。万一、鉄道によることが不可能と考えられる場合には、行軍隊形でルガにおもむき、クルイモフ将軍の完全なる指揮下にはいられよ》

と命じているにもかかわらず、バグラチオンは依然として行軍隊形で進む決心がつかず、軍団本部の乗車を命令したのであった。

かつてエヴゲーニイ・リストニッツキイが勤務していた連隊は、第一ドン・コサック軍団に編入されている他の諸連隊とともに、レヴェリ――ウェーゼンベルク――ナルワの線に沿ってペトログラートへ向け転送されていた。二十八日の午後五時、この連隊の二個中隊からなる軍用列車は、ナルワに到着した。輸送指揮官はナルワとヤンブルク間の鉄道線路が破壊されているため、今夜はとても出発できないが、しかし現在鉄道大隊の一部隊が特別列車で現地へ急派されているから、もし復旧がうまくいけば、明朝までには列車を出すことができるだろうと聞かされた。輸送指揮官はいやでも応でもそれに従わざるを得なかった。舌打ちしながら、彼は自分の車室へはいり、将校たちにこの知らせを話して聞かせると、お茶を飲むべく腰をおろした。

今にも降り出しそうな、うっとうしい夜が訪れた。入り江のほうから、身にしみるような湿っぽい風が吹きつけた。線路の上や車室の中で、コサックたちはぼ

そぼそと低い声で話し合い、機関車のうなりにおびえた馬どもが、板張りの床に蹄の音を立てた。列車の後尾では、若いコサックの歌声がひびき、闇の中でだれにともなく訴えている。

さらばわが町、故郷の町よ、
さらばふるさと、わが住む村よ！
いとしの乙女よ、またあう日まで、
野辺の花にも、お別れか！
いとし恋しの、あの膝枕、
甘い夢路を、たどったものを。
今じゃ夜通し、戦さの庭に、
銃を片手の、見張りの身……

灰色の巨大な機関車のかげからひとりの男が現われた。うた声に耳を傾けながら、しばしたたずみ、黄色い明かりを点々と反射している線路を見渡していたが、やがて自信にみちた態度で列車のほうへ歩き出した。彼の足音は枕木の上にこつこつと低くひびいていたが、そのうちに、固められた砂地の赤土へ出て歩くようになると、聞こえなくなった。彼は最後部の車両のわきを素通りして行こうとしたが、昇降口のところにいたコサックが、歌を中途でやめて声をかけた。

「だれだい？」

「だれだっていいじゃねえか？」気のない返事をして、男は通り過ぎようとした。

「なんだって夜中にぶらぶらしてやがんだよ？　盗人野郎、ひっぱたくぞオ！　よく寝てるかどうか、様子をうかがってやがるんだろ？」

それには答えず、男は列車の中ほどまで進むと、車室の戸口のすき間に首をつっ込んでたずねた。

「何中隊だい？」

「囚人部隊だ」暗闇の中からげらげら笑う声が聞こえた。

「おい、ふざけてるんじゃねえんだぞ、こっちは、何中隊だよ？」

「第二だ」

「第四小隊はどこにいる？」

「前から六つ目の車だ」

機関車から六番目の車両のわきで、三人のコサックがタバコを吸っていた。ひとりがしゃがみ、あとのふたりはそのわきに立っていた。彼らは自分たちのほう

へ近づいて来る男を、黙って見つめていた。
「達者でなによりだね、村の衆！」
「おかげさんで」そばへ来た男の顔に見入りながら、ひとりが答えた。
「ニキータ・ドゥーギンは元気かい？　ここにいる？」
「おれが、そうだけど」しゃがんでいたのが、うたうようなテノールで答えて立ち上がり、靴の踵でタバコを踏み消した。「ちょっと覚えがねえな。だれだい、あんた？　どこから来たね？」彼は、この外套を着こみもみくちゃの兵卒帽をかぶっている、見知らぬ男の顔を見分けようとして、ひげ面を差しのべたが、いきなり頓狂な声を張り上げた。「イリヤ！　ブンチュークだろ？　ようッ、おまえいったいどこから来たい？」
ざらざらする掌でブンチュークの毛深い手を握りしめたまま、彼のほうへ身を傾げて、低い声でニキータは言った。
「こいつらはみんな仲間だ、心配しねえでいいよ。どこから来たんだい、おまえ？　おい、話して聞かせろや！」
ブンチュークは他のコサックふたりとも握手をかわすと、鉄のような低いつぶれた声で答えた。
「ピーテル（訳注　ペトログラートの略称）から来たんだ。やっとさがしあてたぜ。用事があるんだ。相談しなくちゃならねえことがある。うれしいよ、兄弟、ぴんぴん達者でいてくれてな」
彼はにっこりした。すると、額の広い角ばった大きなどす黒い顔に、真っ白な歯並みがあらわれ、目があたたかい、控え目な、うれしそうな光に輝いた。
「相談だって？」ひげ面の男のテノールが歌うように言った。「おまえは将校さんだけど、おれたちの仲間を上から見おろしたりしねえっていうわけか？　やあ、ありがとう、イリューシャ、いいことがあるだろうぜ。おれたちはやさしい言葉なんて、まるっきり耳にしたこともないんだからな……」彼の声音には、好人物らしい善良な笑いの調子がこもっていた。
ブンチュークも同様あいそよく冗談を返した。
「分った、分った、そうひがまなくたっていいさ！　まったくおまえときた日にゃ、年がら年中、冗談ばっかり言ってるんだな！　そんなふざけてばかりいるうちに、ひげはもう臍より下までのびちゃってるじゃね

えか」
「なあにひげなんざ好きなときに剃れるわさ。ところで、ピーテルじゃどうなってるんだい？　暴動が始まったかい？」
「車の中へはいろうじゃないか」車内で話すからさ、というように、ブンチュークがうながした。
彼らは車室にはいった。ドゥーギンがだれかを足でつついて、小声で言った。
「起きろ、おい！　大事なお客さんが見えたんだ。さあ、早く、早く！」
コサックたちはうなって起き上がった。タバコや馬の汗の変な匂いのしみこんだだれやらの大きな掌が、暗闇の中で、鞍に腰かけたブンチュークの顔にそっと触れ、撫でまわして重油のような太いバスでたずねた。
「ブンチュークか？」
「うん。おまえ、チカマーソフだろ？」
「そうだ、おれだよ。しばらくだったなあ、おい！」
「しばらくだなあ」
「一走り行って、第三小隊のやつらを呼んでくらあ」
「うん、そうだ、行ってきてくれ！」
第三小隊は、ふたりだけが馬の世話に残り、あとはそっくり顔をそろえてやって来た。コサックたちはブンチュークのそばへ寄り、かたい掌をさし出し、小腰をかがめ、ランプの明かりの下で、彼の大きな気むずかしい顔を、しげしげとあらためて見つめるのだった。そして彼をブンチュークと呼んだり、イリヤ・ミトリッチと呼んでみたり、イリューシャと呼んだりした。だれの声にも、友だち同士の暖かい歓迎の気持ちが、同じ調子で響いていた。
車室の内部は息苦しくなってきた。板張りの壁に燈火の光がおどり、へんてこな形の影が何倍もの大きさになって、ゆらゆらと揺れていた。ランプは燈明のようなぎらぎらした光を流して煙っていた。
細かい心づかいでブンチュークを明かりに近くすわらせた。前のほうの連中はしゃがみ、他の者は立って、ぐるりとまわりをかこんだ。テノールのドゥーギンが咳払いをして切り出した。
「おまえの手紙はよ、イリヤ・ミトリッチ、こないだ受け取ったぜ。だけど、おれたちはおまえの口から直接聞いて、この先どうしたらいいもんか、一つ知恵を借りてえんだ。今、ピーテルへ連れてかれるとこなんだが、おまえだったらどうする？」

「まあ、こんなわけなのさ、ミトリッチ」デッキのすぐわきに立っていた、しわだらけの耳たぶへ耳輪を飾り立てたコサックが言い出した。それは、いつだったか楯の上で茶を沸かすのをリストニツキイに禁止され、こっぴどく怒られたあのコサックだった。「おれたちのところへはいろいろな焚きつけ役がやって来て、やれペトログラートへ行くなだとか、仲間同士戦争する理由はなにもないだとか、まあそんなようなことをいろいろと話して行くんだぜ。おれたちはそりゃ聞くことは聞くけど、どうもやっこさんたちの話にゃ信用がおけねえんだよ。なにしろよその人間だろ。うっかりしてると、そこらでいいようにこき使われねえとも限らねえわけだ。だれもやつらのことは知らねえんだからよ。行くのを断わってみろ、さっそくコルニーロフの野郎がチェルケス兵を繰り向けてくるよ。そうなりゃまた血みどろの騒ぎがおっ始まらあな。だけんど、おめえはおれたちの仲間だ、コサックだからよ、おめえのことならおれたちはすっかり信用してるし、ピーテルから手紙をくれたのをありがてえとも思ってるのさ。おまけに新聞までくれてよ……もっともここじゃ、正直のところ、紙がないもんで、新聞をもらうと……」

「なに言ってんだよ、いい加減なこと言うない、この脳タリン！」ひとりがむかっ腹を立てて話の腰を折った。「おまえは、自分が読み書きできねえもんだから、みんなも自分と同じようにちんぷんかんぷんだと思ってるんだな？　黙って聞いてりゃ、いかにもおれたちがタバコ巻くのに新聞を使っちゃうような言い方じゃねえか！　イリヤ・ミトリッチ、おれたちはあの新聞、それこそ端から端まで、何度も読み返してるんだよ」

「口から出放題のことぬかしやがる、間ぬけめ！」

「《タバコを巻くの》に破いちゃったと言ったも同然だぞ！」

「やはり《バカは死ななきゃなおらねえ》んだな！」

「おい兄弟！　おれはそんなつもりで言ったわけじゃねえんだよ」耳輪をつけたコサックは弁解した。「もちろん、まず新聞を読んでからの話さ」

「おまえも読んだのかよ、それを？」

「おれは読み書きを習わずにしまったから……つまり、おれが言うのは、まずみんなが読んで、そいからタバコを巻くのにってことさ……」

ブンチュークは鞍に腰かけ、かすかにほほえみながら、コサックたちを見やった。すわったまま話をするのはどうもぐあいが悪かったので、彼は腰を浮かし、ランプに背を向けて、ゆっくりと一語一語のばしながら、あまり自信のなさそうな様子で話し始めた。

「君らはペトログラートへ行ってもすることなんぞなにもないんだぜ。暴動なんざ全然起こっていないんだ。それなのに、どうしてそこへやられるのか知ってるかい？　臨時政府をぶっ倒すためなんだよ……そうなんだ！　だれが君らを引きずりまわしてるんだ？　ツァーリの将軍コルニーロフさ。じゃ、どうしてやつはケレンスキイを追い出さなくちゃならないのか？　自分がその後釜にすわるためなんだよ。しっかりしてくれよ、みんな！　木の軛を諸君からはずしといて、今度かわりのをつけるとしたら、鋼鉄のやつをつけるにきまってるんだぜ！　二つの災難のうちどっちか選ばなくちゃならないとしたら、そりゃ軽いほうを選ぶものさ。そうじゃないかい？　いいかい、君らも自分で考えてくれ。ツァーリのときには、君らは鼻柱をなぐりつけられ、戦争の火を君らの手で掻き集めさせていたんだ。もっとも、ケレンスキイの時代になっても、かき集めてることに変わりはないが、しかし鼻柱はなぐられないだろ。ケレンスキイの時代になってから、たとえ少しではあっても、とにかくよくなってきているんだ。ところが、ケレンスキイのあとで政権がボリシェヴィキに移れば、もっともっとよくなるんだぜ。ボリシェヴィキは戦争なんぞ望んでやしない。政権が彼らの手に渡りさえすれば、すぐに平和が来るんだよ。おれはケレンスキイの肩を持ってるわけじゃない。あんなやつは悪魔の手先だからね。ああいう連中は、どいつもこいつも一つ穴のムジナなんだ！」ブンチュークは笑顔を見せると、袖口で額の汗をぬぐいながら語をついだ。「しかし、おれは君らに、労働者の血を流さないように、だから今のところは臨時政府を守るようにって言いたいんだ。なぜ守ってやるのか？　ほかでもない、万一コルニーロフがのさばってきたら、ロシヤは労働者の血の海に、膝までひたってのたうちまわることになるからだ。あんなやつの下では、政権を奪い取って、勤労大衆の手に渡すことが、ますますむずかしくなるからだよ」

「ちょっと待ってくれ、イリヤ・ミトリッチ！」後列のほうから、ブンチュークと同じようにずんぐりした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton